

[報告]

骨髄バンクドナー登録の推進 ～岡山・骨髄バンクを支援する会との連携～

岡山県赤十字血液センター

近藤修康, 宮本紗希, 水畑太輔, 中村清香, 榑 剛, 中村仁美, 爲房奈美子, 廣江善男, 古谷野智,
沼本高志, 松田 清, 内藤一憲, 櫻井 聡, 村上文一, 富田徳子, 川元勝則, 池田和真

Promotion of bone marrow bank donor registration —Cooperation with the Okayama Bone Marrow Bank Support Net—

Okayama Red Cross Blood Center

Nobuyasu Kondo, Saki Miyamoto, Daisuke Mizuhata, Sayaka Nakamura, Tsuyoshi Tabu,
Hitomi Nakamura, Namiko Tamefusa, Yoshio Hiroe, Satoshi Koyano, Takashi Numoto,
Kiyoshi Matsuda, Kazunori Naito, Satoshi Sakurai, Fumikazu Murakami, Noriko Tomita,
Katsunori Kawamoto and Kazuma Ikeda

抄 録

当センターでは岡山・骨髄バンクを支援する会(以下、支援する会と略す)の要請を受け、献血併行型登録会を実施してきた。平成25年10月1日に日本赤十字社が造血幹細胞提供支援機関に指定されたことを受け、平成26年度以降、支援する会と積極的に情報交換し、所内渉外担当者と連携して、学域および市町村を中心に献血会場や街頭献血など、より多くの献血者が見込める会場を選定した。公益財団法人日本骨髄バンクが行う説明員養成研修を受講して登録体制の強化を図った。岡山県の献血併行型登録会実施回数、登録者数(うち献血併行型登録者数)を、平成23～25年度の3年間合計40回、1,067人(665人)から、取り組み後の平成27～28年度の2年間合計116回、1,262人(993人)に増やすことができた。

今後は献血における若年層対策と並行して、大学等の学域・街頭での登録会実施回数の増加とセンター職員のスキルアップによる一会場あたりの登録者数増加に努める予定である。

Key words: promotion, bone marrow bank donor registration,
cooperation with a support organization,
Okayama Bone Marrow Bank Support Net

【はじめに】

日本では、毎年新たに約1万人が白血病などの血液疾患を発症している。そのうち公益財団法人

日本骨髄バンク(以下、骨髄バンクと略す)を介する移植を必要とする患者数は、毎年約2,000人であり¹⁾、年間の非血縁者間造血幹細胞移植数は約

1,200件である。一方、全国でドナーとして骨髄バンクに登録されているのは平成29年9月末日現在で477,839人であるが、骨髄バンクドナーは満55歳の誕生日を迎えることによる自動的な取り消しなどにより、年間2万人以上の方が退会されている²⁾。

当センターでは、平成26年度以前から岡山・骨髄バンクを支援する会(以下、支援する会と略す)と骨髄バンクドナー登録者数(以下、ドナー登録者数と略す)の増加に向けて献血併行型登録会を実施していたが、「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」(平成26年1月1日施行)³⁾の一部である「造血幹細胞提供支援機関」指定に関する附則が平成25年9月1日に施行され、平成25年10月1日に日本赤十字社が支援機関として指定されたことを受け、平成26年度からは支援する会との情報交換による登録会場の選定など、ドナー登録者数の増加に向けてより積極的な取り組みを行ってきたので報告する。

【方 法】

学域および職域を中心とした献血会場や、ライオンズクラブが主催する街頭献血など多くの献血者が見込め、骨髄登録に繋がる会場を骨髄登録担当と渉外担当が協議し、とくに大学での献血併行型登録会の実施回数を増やした。骨髄登録担当と渉外担当が協議した内容は支援する会へ報告し、支援する会が実施会場を決定した。支援する会と血液センター双方が登録会場へ人員を配置するための日程調整や人員調整を行った。

次に、登録会の実施回数を増やすには、より多くの職員が正確な説明を行える必要があるため、骨髄バンクが行う説明員養成研修会(約2時間)を受講した。(公財)日本骨髄バンク広報渉外部ドナー登録会説明員マニュアルにて説明を受け、2人1組で解説グラビアを用いて提供までの流れをロールプレイで実践するなど職員の知識向上を図り、骨髄登録の必要性について理解を深めた。今回の試みの評価については平成26年度を境に取り組み前の平成23年度～25年度と取り組み後の平成27年度～28年度の献血併行型登録会実施回数、ドナー登録者数を比較することにより検証し

た。

【結 果】

平成27年度および平成28年度において、献血推進部門をはじめとする当センター職員合わせて15名が説明員の認定を受けた。

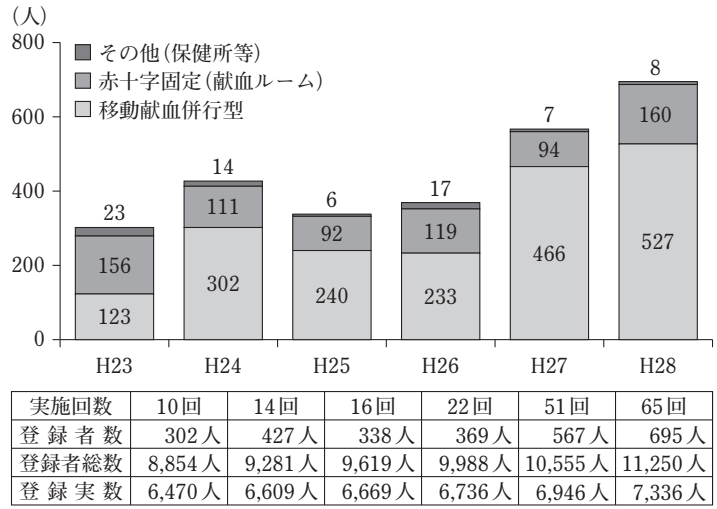
図1に年度別のドナー登録者数の推移を示した。平成23年度～平成25年度における献血併行型登録会実施回数は10～16回と少なかったが、平成27年度と平成28年度はそれぞれ51回、65回と大幅に増やすことができた。平成28年度に献血併行型登録会を実施した65会場は、同年度の移動採血稼働数684稼働の約10%に相当した。これに伴い、平成27年度と平成28年度の献血併行型登録者数も466人、527人とそれ以前の同ドナー登録者数の約2倍に増加させることができた。

図2に献血併行型実施会場域区分別ドナー登録者数の推移を示した。平成27年度と平成28年度においては、職域、地域、街頭、学域のいずれの域区分においてもドナー登録者数を増加させることができ、全体のドナー登録者数増に繋がった。

平成24年度から高等学校卒業記念献血と並行して骨髄バンクドナー登録会を実施している(図3)。献血、骨髄バンクドナー登録のいずれの場合においても保護者の同意を得ている。平成28年度における献血協力者数は152名、ドナー登録者数は17名(1校)であった。

【考 察】

平成26年の秋に支援する会のメンバーとドナー登録者数増加に向けた会合を持ち、その後は、支援する会と登録担当がより積極的に情報交換を行いながら業務を行った。当初は支援する会から、土曜日・日曜日・祝日にリピーターの多い固定施設(献血ルーム)での登録会実施の要望があったが、実際は献血者が多いために待ち時間が長くなり、骨髄バンクドナー登録の勧誘をするには必ずしも適切とはいえなかった。そこで移動献血併行型でのドナー登録者数増加を強化することとした。過去の献血実績をもとに登録会場を選定するなど、支援する会と一体となってドナー登録者数



※登録者総数：年度末現在のドナー登録者総数
※登録実数：登録者総数から取り消し総数を引いた年度末現在のドナー登録者実数

図1 年度別骨髄バンクドナー登録者数の推移

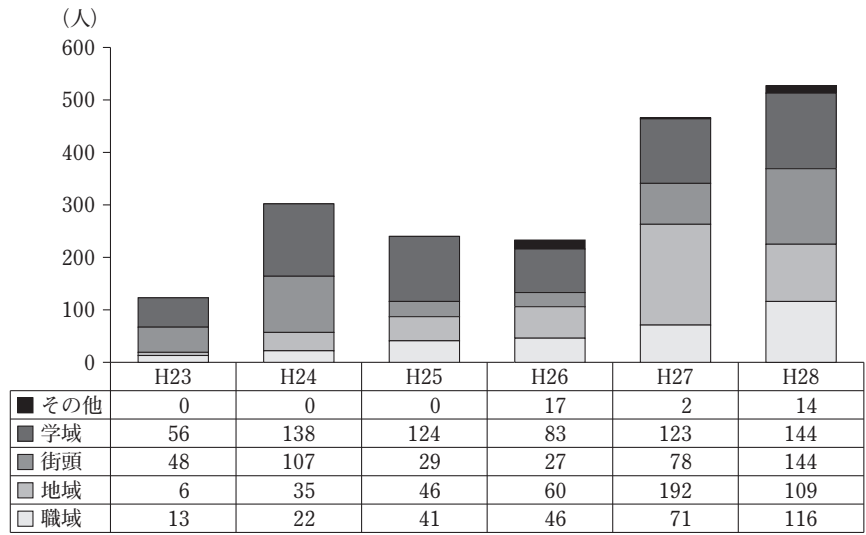


図2 献血併行型域区分別登録者数の年度別推移

増加に向けた対策に取り組んだ。登録担当者は献血会場の献血者数、年齢層、受付時間、場所の確保などに精通している渉外担当者と協議し、渉外担当者が企業、市町村担当者、ライオンズクラブ

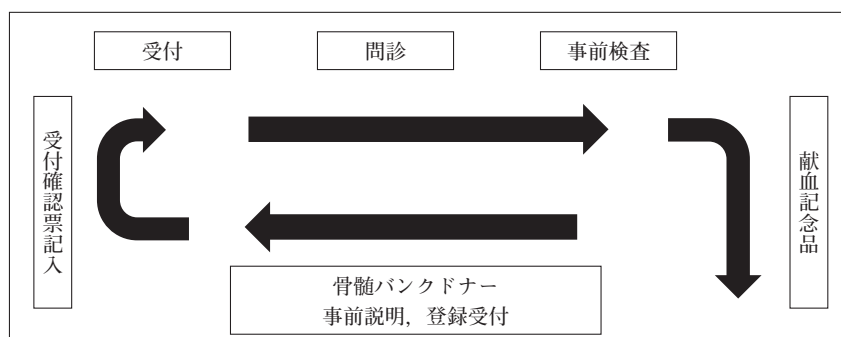
などに打診後、登録担当者が支援する会に連絡して会場を決定することとした。登録担当者以外の職員(推進課、献血課)であっても、骨髄バンクが主催する説明員養成研修会を受講することによ



A. 移動採血車にて献血実施



B. 骨髄バンクドナー事前説明



C. 会場での配置図, および動線

図3 学域(高等学校)での骨髄バンクドナー登録会風景

て対応や声かけを担当することが可能となり、その結果、県下全域を対象とした登録会場のエリアや実施会場の選定枠が広がり、平成27年度以降、献血併行型の職域・街頭・学域のドナー登録者数の増加に繋がった。

今後は献血者と同様に、大学等の学域や多くの若者が集まる街頭での献血併行型登録会の実施回数を増加させることが将来の骨髄バンクドナーを担う若年層のドナー登録者数を増加させるうえで

効果的ではないかと考える。一会場あたりのドナー登録者数としてはまだまだ少ないのが現状であるが、多くの献血会場で登録会を実施し、登録を呼びかけることが普及啓発に繋がると思われる。造血幹細胞移植を待つ患者さんのために一人でも多くの方に骨髄バンクドナー登録の必要性について理解を求め、そのためには血液センター職員も十分な知識を身につけ、ドナー登録を推進していかなければならないと考えている。

文 献

法第45条及び法に基づく造血幹細胞提供支援機関に関する省令

- 1) 造血幹細胞移植情報サービスホームページ：骨髄バンク統計

<http://www.bmdc.jrc.or.jp/generalpublic/statistics.html#an1> (平成29年12月現在)

- 2) 日本骨髄バンクホームページ：骨髄バンクデータ

集

<http://www.jmdp.or.jp/data/> (平成29年12月現在)

- 3) 厚生労働省ホームページ：造血幹細胞移植情報移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律

http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/ishoku/dl/140328_02.pdf (平成29年12月現在)